

FD・SD Faculty Development Staff Development Activity Report

2023

成城大学

はじめに：副学長／FD・SD小委員会委員長ご挨拶
新任教員研修会
授業改善アンケート
ピアチューター制度に係るSD活動報告
FD・SDセミナー 1
「『THE 日本大学ランキング』報告会」
FD・SDセミナー 2
「設置基準改正に伴う対応を考える」

FD・SDセミナー 3
「オンラインツールで授業を活性化! Vol.2
～双方向コミュニケーションツール“slido”を使ってみた!～」
FD・SDセミナー 4
「教育の内部質保証とeポートフォリオに期待される効果」
各学部及びセンターのFD・SDへの取り組み
2024年度活動計画



学生を懸命にさせる教育をめざして



はじめに

副学長
教育イノベーション委員会FD・SD小委員会委員長

都築 幸恵 教授

教育イノベーションセンターでは、本学教職員の皆さまのご協力のおかげをもちまして、2023年度も多様なFD・SD活動を展開することができました。ここにお礼申し上げますとともに、2023年度の活動を振り返り、「新任教員研修会」、「FD・SDセミナー」、「授業改善アンケート」につきましてご報告いたします。

2023年4月、新たに成城大学に着任された先生方をお迎えして「新任教員研修会」を開催いたしました。杉本義行学長から成城学園の歴史や大学の取り組み等についてご紹介いただき、キャリアセンターの勝又あずさ先生にワークショップをファシリテートしていただきました。学長も含めた参加者全員でのグループワークでは、活発な議論が展開され、相互理解と親睦が深まるとともに、アクティブラーニングの手法を体験的に学ぶことができる良い機会となりました。

2023年度は、4回のFD・SDセミナーを開催しました。第1回は、株式会社進研アド様をお迎えしての「『THE日本大学ランキング』報告会」で、本学の強みや今後の課題について、提示されたデータやそこから得られる示唆をめぐって、熱心に議論が交わされました。第2回は、「設置基準改正に伴う対応を考える」をテーマに、東京都立大学の宮林常崇氏をお迎えしました。大学設置基準等の一部を改正する省令が令和4年10月1日から施行されましたが、この改正は大学の今後の在り方を大きく変えるものであり、基幹教員制度の導入など新たな内容が盛り込まれています。本セミナーは特に多くの教職員が会場に詰めかけ、熱心に宮林氏のお話に聞き入りました。第3回は、「オンラインツールで授業を活性化! Vol.2～双方向コミュニケーションツール“slido”

を使ってみた!～」と題し、2022年度に開催された石川県立大学の小椋賢治先生の「オンラインツールで授業を活性化!～双方向コミュニケーションツール“slido”の実践を中心に～」の第二弾として開催しました。小椋先生のワークショップに参加した先生方が2023年度より自らの授業でslidoを導入し、学生との双方向型コミュニケーションに役立てていただいていたのですが、当セミナーでは、学部・授業規模の異なる先生方3名にslido導入の実践報告をしていただきました。第4回は、「教育の内部質保証とeポートフォリオに期待される効果」と題し、北海道大学高等教育推進機構の江本理恵先生にご講演いただきました。江本先生は、岩手大学でアイフォリオというポートフォリオシステムを開発されました。教員や学生にとって使いやすいポートフォリオのあり方について、ご教示いただきました。

授業改善アンケートにつきましても、先生方のご協力のおかげで高い実施率となっています。集計結果は、学部長、研究科長、各センター長からのコメントとともに本学ホームページに掲載されています。また、アンケート結果をもとにベストティーチャーを選出・表彰するとともに、毎年発刊する「授業カタログ」で先生方の授業の魅力や工夫を紹介しています。「授業カタログ」は、より見やすく掲示しやすい形態にするため、今回からA3版に変更し、2名の先生を選出して、それぞれの授業の特色と取り組みについてご紹介いただいています。

以上が2023年度のFD・SDに係る事業の簡単なお報告となります。成城大学の授業が、よりいっそう学生の学びの意欲と成果を高めるものとなりますよう、今後ともどうぞよろしくお願ひいたします。

2024年10月

新任教員研修会

新任教員の先生方に一日でも早く本学をご理解いただき、円滑な教育活動を進めていただくための一助として、毎年、新任教員研修会を実施しています。

2023年度は、新任の先生方全員に事前に説明動画と資料を配信し、非常勤講師の先生方へは、4月1日(土)～4月28日(金)を期間とし、オンデマンド型の実施となりました。

4月1日(土)に専任教員7名(経済学部2名、文芸学部2名、社会イノベーション学部3名)の先生方を対象に実施された対面での研修は二部構成とし、第一部では杉本学長から学園の歴史や大学の取り組みについて説明され、第二部では本学キャリアセンター勝又あずさ特別任用教授によるワークショップが行われました。

研修当日の様子(対面)



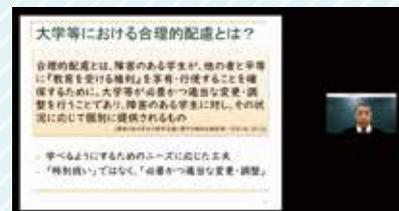
学長による本学の取り組み等に関する説明



ワークショップでは教職員間の交流をはかりながらアクティブラーニングの手法等を体験した

各部署担当者からの説明動画(オンデマンド)

内容	対象者	担当
授業・成績・試験に関すること、学年暦、Live Campus U等について	専任教員・非常勤講師	教務部
教育改革支援、FD・SD活動支援、IR活動支援、なんでも相談窓口等について		教育イノベーションセンター
特別な支援を必要とする学生について		バリアフリー支援室
教育研究用ネットワーク・教材作成設備・e-learningツールとその利用方法について	専任教員	メディアネットワークセンター
専任教員対象の補足説明		総務課
教員業績システムについて		研究機構事務室
研究支援(科学研究所助成事業、特別研究助成費等)について		



担当者からの説明動画

ピアチューター制度に係るSD活動報告

<Supporters' Forum 2023 at Seijo University and Konan University>

2023年11月18日(土)、本学サポーター団体の相互理解と他大学の学生サポーター団体との連携を図る目的で、サポーターズフォーラムを開催しました。

7回目となる今年度は、成城大学と甲南大学の2会場を中継でつなぎながら、各会場において対面形式でワーク等を実施した。25大学及び高校3校、総勢約200名の学生・生徒が参加する大きなイベントとなりました。

第一部にNPO法人アサーティブジャパンの大井健司氏をお招きし、「もう一步踏み込んで本音を話せる関係づくり」というテーマでご講演いただき、全体ワークを行いました。第二部では「学習・キャリア」「国際交流」「ライブラリー」「高大連携」の4つの分科会において、グループワークや発表、情報交換等、分科会ごとに様々な形で実施しました。

毎年度新しい試みを行っているフォーラムですが、特に、今年度で3回目となる「高大連携」分科会では、高校生には探究学習の成果や課外活動、大学生にはゼミナールでの研究をポスターセッションの形式で発表してもらい、高校の各チーム・個人に対しては、参加者同士で投票を行い、最優秀発表賞を決定しました。

フォーラムの開催に向けて、職員は学生の主体的な行動を促す支援を行い、フォーラム全体を通してSD活動の大きな取り組みとすることができました。

【Supporters' Forum 2023 のプログラム】

14:00～14:10	開会式・趣旨説明会
14:10～15:20	全体ワーク 「もう一步踏み込んで本音を話せる関係づくり」
15:35～17:05	分科会
17:10～17:15	閉会式
17:20～	懇親会



高校生と大学生がポスターセッションを行った「高大連携」分科会

<大学教育改革フォーラムin東海2024>

2024年3月2日(土)、名古屋大学東山キャンパスにおいて、「大学教育改革フォーラムin東海2024」が開催され、ピアサポーター4年生5名、教育イノベーションセンター職員2名が、「コロナ禍を乗り越え進化した 成城大学ピアサポート活動の歩みを振り返る」というタイトルでポスター発表を行いました。

発表のテーマについては、令和2年から始まったコロナ禍によってキャンパス環境が大きく変化する中でも、オンライン等を駆使してピアサポートを続けたという経験から、「コロナ世代の学生」だからこそできた支援活動の歩みを報告することとし、学生・職員間での打ち合わせを重ねながらポスターを作成しました。

発表は、会場の名古屋大学東山キャンパスアジア法交流館にて、対面形式で行われました。ピアサポーターの運営・発足や学生募集、教職員と学生との連携、そして学生としての学び等について、多くの質問が寄せられました。

また、ポスターセッションの時間では、発表者としてだけでなく、職員・学生ともに他大学のポスターセッションへ赴き、大学教育や組織運営などの発表から今後へ繋がる学びを得ることができ、大変貴重なSD活動となりました。



職員・学生とで作上げた発表ポスターの前で

▶
ポスターはこちらのQRコードからご覧になれます



「THE 日本大学ランキング」 報告会

講師 伊藤 嗣美 氏(株式会社進研アド)

日時 2023年6月8日(木) 13時～14時30分

「THE日本大学ランキング」とは「Times Higher Education (THE:タイムズ・ハイヤー・エデュケーション)」が発表する大学ランキングであり、「研究力」「教育力」「社会貢献力」などさまざまな観点から日本の大学を見ることができ、大学の新たな魅力を見つけることができるものとなっています。

2023年3月に結果が発表されたことを受け、本ランキングの作成に携わっている株式会社進研アドの担当者をお招きし、ランキングの概要、高校での活用状況、各大学での取り組み等について解説いただきました。

本ランキングにおける日本大学ランキングでは、教育環境や学生の学びの質、成長性に注目し、「教育リソース」「教育充実度」「教育成果」「国際性」の4分野16項目を指標としてランキングが作成され、2019年からは、教育の受け手である在学生の「声」が「学生調査」としてランキングに反映されています。

当日は、杉本 義行 学長をはじめとした部局長の教員を中心に、大学の入学センター、キャリアセンター、国際センターなどから職員の出席もありました。解説いただいた内容を受け、本学がステークホルダーにどのように見られたいのか明確にすること、本学の強みやブランディングが必要となること等が再認識され、あらためて、本学が取り組むべき課題や方向性を実感できる時間となりました。



ランキングの詳細についてのご説明



(株)進研アド伊藤氏からのお話し

FD・SD Topic

本学のFD取り組み強化のため、2023年9月に全教員が「『THE 日本大学ランキング』報告会」の動画を視聴しました。

※対面参加者内訳は以下の通りです

大学教員 13名

職員 13名

**学長室・教育イノベーション委員会
FD・SD 小委員会共催**

「設置基準改正に伴う対応を考える」

講師 宮林 常崇 氏(東京都立大学・理系管理課長(学務課長兼務))

日時 2024年1月23日(火) 18時30分～20時30分

大学設置基準の一部を改正する省令等が令和4年9月30日に公布され、同年10月1日から施行されました。「大学設置基準の大綱化」と呼ばれた改正に続く、大学のこれからの在り方を大きく変える改正として注目を集めており、基幹教員制度の導入や授業科目の単位数の取り扱いなど、新たな内容が盛り込まれているため、本学においてもこれらの情報を把握・収集すべく、本セミナーを開催いたしました。

講演では、法令の体系や中央教育審議会の答申といった改正の背景となる視点から始まり、内部質保証の観点から重要となるポイントをいくつかお話いただきました。講演のメインでは、基幹教員制度や単位制度等について、改正の趣旨や概要とともに他大学のケースをご紹介いただき、今後、大学の現場で対応が必要となる事項について、例えば、1単位あたりの授業時間数や卒業要件の明確化等が必要となることなど、詳細なご説明をいただきました。

当日は、大学評議会評議員、FD・SD小委員会委員、その他教職員を含めた総勢53名が参加しました。当日参加が叶わなかった教職員向けには、Live Campus Uを通じて資料の共有も行われました。

大学設置基準改正に伴い、今後、本学が対応すべき事項について、参加者各自が真剣に考える、大変有意義な時間となりました。



杉本学長から開会のご挨拶



宮林氏による説明の様子

参加者内訳

所 属		人 数
学内	大学教員	25 名
	職員	28 名
計		53 名

オンラインツールで授業を活性化! Vol.2

～双方向コミュニケーションツール“slido”を使ってみた!～

講師 河口 洋行 先生(経済学部)

細田 雅也 先生(文芸学部)

都築 幸恵 先生(社会イノベーション学部)

日時 2024年3月12日(火) 13時30分～16時30分

場所 9号館2階 データサイエンススクエア(921教室) ※オンライン(Zoom)併用

参加対象 成城学園教職員

本セミナーは、2022年度末に石川県立大学小椋賢治教授を講師にお迎えし実施したFD・SDセミナー「オンラインツールで授業を活性化!～双方向コミュニケーションツール“slido”の実践を中心に～」の第2弾として、開催されました。

2022年度のセミナーを受け、2023年度に教育イノベーションセンターでは試行的に“slido”有料アカウントを用意し、授業で実践いただける先生を募集したところ、19名の先生方からお申し込みをいただき、活用いただきました。本セミナーでは、実際に双方向型授業において“slido”を活用した3名の先生方にご登壇いただき、“slido”のメリットや、授業で使用する際の注意点などを交えて、効果的な活用事例をご紹介いただきました。

セミナー全体は3部構成で、まずは“slido”について、教育イノベーションセンターから概要と機能の説明を行いました。“slido”は、会議やイベントで参加者とのインタラクティブなやりとりを可能にするためのWebアプリケーションサービスであり、アプリレスのため初期投資が不要で基本操作が比較的簡単であること、気軽に使用・参加ができ、匿名での質問が可能であること、すべてのデータがオンラインで集められるため、データをアンケートの分析などに使用できることを説明しました。加えて、今回ご

【プログラム】

13:40～13:50	「slidoとは」 概要と機能について説明
13:50～15:00	【話題提供】 「slidoをつかってみた!」 i 河口 洋行先生(経済学部) ii 細田 雅也先生(文芸学部) iii 都築 幸恵先生(社会イノベーション学部)
15:00～15:30	コーヒープレイク(情報交換)
15:30～16:30	ハンズオン・ワークショップ

報告いただく先生方にはライブ投票やアイデアのブレインストーミングなどの機能などが使用できる有料の「ティーチャープラン」を使用し、授業実践を行っていただいたことが報告されました。

第2部は異なる規模・形態の授業での活用事例を先生方にお話しいただきました。

経済学部の河口先生には、オンラインで、実際に授業で活用しているデモをまじえてご報告いただきました。中規模の講義クラスで使用いただきましたが、他投票アプリと比較して“slido”は「PPTに埋め込みができる」、「操作が簡単」、「投票状況を非表示にできる」利点があると述べられ、使用するメリットとして「学生に能動的行動が出て参加意識が高まる」、「学生の注意を引く事ができる」、「教員側が理解度を把握できるので、それに応じて補足説明を入れることができる」という点を挙げられ、デメリットとし

て、「授業への参加意識は上がるが、理解度には影響しないかもしれない」と述べられました。また“slido”は大人数講義に向いているのではないかというご自身の所感や、匿名投票による心理的安全性についてもお話しいただきました。

次に、文芸学部の細田先生から、10名及び30名の語学の授業で“slido”を使用いただいたご報告をいただきました。先生は主に、授業の重要な点について学生に質問し、クラス全体で回答を共有する目的で“slido”を使用したということで、利点として、学生の心理的障壁を下げ、多くのアイデアをクラスで共有できること、そして学生の注意を視覚的に集められることを挙げられました。また、質問と回答がウェブ上に残るため、後で振り返りや確認が容易になる点もお話しただけました。一方で同じ形式の質問を繰り返すと学生が飽きてしまう可能性があるため、授業で特に伝えたいポイントに焦点を当てて教員側が活用する重要性もご提案いただきました。

社会イノベーション学部の都築先生からは、大規模講義授業での事例をご報告いただきました。授業の双方向性を高めるために、学生に質問を投げかけ、その回答の共有に活用し、第一段階では定義や概念を「すっきり理解」するために、第二段階では1つの事象に対する学生の異なる見地を対比させることで「熟慮に向かうためのモヤモヤ」を促すための活用をお話しいただきました。メリットとして、学生の理解度の把握、学生の意見の明確化を挙げられました。一方で、“slido”での授業展開も、授業回数を重ねるにつれて“slido”への参加者が減少する傾向も見られる、とお話しいただきました。

実践報告をいただいた後の質疑応答では、参加者の先生方から実際にご自身が授業で“slido”を使用した経験を踏まえて、質問が寄せられました。

第三部ではハンズオン・ワークショップを行い、事例報告をいただいた先生方と参加者が共に実際に“slido”を「設定側(ホスト)」として設定し操作をしながら、「参加者側(ゲスト)」の

操作も行い、両者の視点を体感しながら活発な意見交換を行いました。

”slido”の概要を確認し、先生方が授業で活用した率直なご意見・ご感想を聞いた上で、実際に操作しながら授業やイベントで使用している際の疑問点を共有し合うことで、今後にかける活用法を学ぶことのできる貴重な時間となりました。

参加者内訳

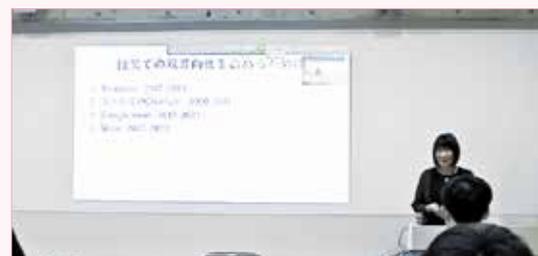
所属		人数
学内	大学教員	14名
	職員	9名
計		23名



河口先生による話題提供



細田先生による話題提供



都築先生による話題提供



ワークショップでは参加者同士の意見交換も

教育の内部質保証と eポートフォリオに期待される効果

講師 江本 理恵 先生(北海道大学高等教育推進機構 教授)

日時 2024年3月19日(火) 16時～17時30分

場所 2号館1階大会議室

現在、本学では第3次中期計画(成城学園第2世紀プラン2030)における学生支援として、「学習ポートフォリオ」の導入を検討しています。

今回のFD・SDセミナーでは、学修支援システム Iⁿ Folio(以下、「アイフォリオ」という。)を前任校である岩手大学において企画・開発された江本先生を講師としてお迎えしました。アイフォリオは、教育の質保証において期待されるeポートフォリオの役割を果たし、かつ、教育の内部質保証システムの原動力となるシステムです。学修成果を可視化する手法及びそのシステムを広く教職員・学生に活用してもらうために実施されてきた取組事例についてご講演いただきました。

一般的に学修ポートフォリオとは、学生が授業で作成したレポートや論文、課題達成のために収集した資料や成績表などの学修成果と、学修の過程において学んだ点や気付いた点などを記録していくものです。学期毎に自分が履修した授業の記録を残し、学期末に自分自身の成長

を振り返って来学期の目標を立てることに活用したり、大学における学修の記録を残しておく、大学で何を学んだか、そのときにどのようなことを考えたかなど、自分自身を振り返るために活用されます。そのため、業者が市販する学修ポートフォリオシステムは、概ね学生のみ利用を前提に構成されています。

これに対して、「アイフォリオ」は、教員と学生双方が役立つポートフォリオシステムとなっています。その理由は、ポートフォリオ機能だけではなく、内部質保証のための根拠データを抽出することを目的としているからです。

具体的にどのような機能があるかという点、下表(【アイフォリオの機能一覧】)に記載された機能のうち、内部質保証にかかわるデータを有していることがアイフォリオの特徴です。

つまり、蓄積したデータを学生の利用だけに留めるのではなく、教職員が提供した教育活動の成果を可視化し、今後の教育活動の見直しに活用することができるよう開発が行われました。

【アイフォリオの機能一覧】

項目	学生	教職員
内部質保証	自分の成績を確認できる。	担当学生の成績を確認できる。
	自分の取得単位から、DPの達成状況を確認できる。	担当学生&プログラムのDPの達成状況を確認できる。
	DPの自己評価を蓄積できる。	担当学生&プログラムのDPの自己評価を確認できる。
ポートフォリオ	全学DP、学修時間、学修体験等の自己評価を蓄積できる。	担当学生&プログラムの全学DP、学修時間、学修体験等の自己評価を確認できる。
	提出したレポート等を蓄積できる。	担当学生の学期の目標、将来の目標等を確認し、コメントを入力することができる。
	学期の目標、将来の目標等を設定し、教員とやりとりできる。	担当学生の授業以外の様々な活動の記録を確認し、コメントを入力することができる。
	授業以外の様々な活動の記録を蓄積できる。	

【アイフォリオ開発の目的】

<教職員の立場>	
●学位授与の方針に対する達成状況の調査	●プログラム・レビューに必要な状況の調査
<学生の立場>	
●達成状況を可視化	●学修状況の蓄積

【教育の内部質保証システム】

<教職員の立場>	
「カリキュラム立案」→「授業実施」→「データを収集」→「データに基づいてレビュー」	
<学生の立場>	
「履修計画」→「授業・学習」→「成績を確認／データを蓄積」→「データに基づいた指導」	

学生は、ログインすればユーザー情報画面で所属学部のディプロマポリシーを確認することができます。これにより大学での学びから期待される能力の把握が明瞭となります。その他、学期ごとに「DPに対する自己評価」や「1週間の過ごし方」、「授業以外の活動の記録」や「将来の希望」等を入力することができます。

これに対して、教職員は学生が入力した集計結果についてプログラム(授業科目)単位で確認することができます。教員閲覧機能で特徴的なものに「学生の自己評価と成績のクロス集計」があります。この機能により、学生の自己評価と教員の成績評価にどの程度開きがあったかについて把握することができる重要なデータが抽出可能となっています。岩手大学では、学生が成績を確認する前に必ず自己評価を入力させます。自己評価を入力しないと、成績結果を閲覧できないような仕様となっています。

また、データの信憑性を担保するためには、多くの学生が利用していることが条件となりますが、アイフォリオは、学務システムの下に組み込まれているため、利用率が一番低い学部においても、90%以上と高い数字を確保できてい

す。

次に、アイフォリオの開発目的と教育の内部質保証システムですが、アイフォリオの開発は、教育の内部質保証システムに貢献することが大きな目的でした。内部質保証のプロセスでは、根拠となりうるデータを基に議論することが求められます。その材料となるのがeポートフォリオであり、収集されたデータを分析し、各学部のFDの機会に提供することができること、データを収集するシステムにも興味を持ってもらうことで、個々の教職員が内部質保証に関わる体制を構築することが重要であること、教職員と学生がアイフォリオを通して、PDCAを機能させているとの説明がありました。

最後に、内部質保証において、どの「質」をよくするべきか、また、どの「質」を重要視するかについては、各大学が各々判断すべきとの言葉を頂戴しました。

参加者内訳

所 属		人 数
学内	大学教員	9名
	職員	11名
計		20名



アイフォリオの概要説明



北海道大学における内部質保証に関する説明



当日参加した教職員の様子

FD・SD Topic

本学のSD取組強化のため、2023年9月に全教職員が「成城学園における個人情報保護」の動画を視聴しました。

各学部及びセンターのFD・SDへの取り組み

文芸学部

宮崎 修多 教授

さすがにFD・SDと聞いて、何?と首をかしげる向きは減ったものの(私自身はまだ首をかしげているが)、畢竟は個性をもった教職員各人の意識の問題だけに、オールマイティな方法などなからう。実際わが文芸学部としては、例の大学IRコンソーシアムアンケートの集計結果に基づいて教授会でFD研修を実施し、職員が学園の「個人情報保護規定」についてのビデオを視聴しつつSD研修を行った他は、2023年度中にFD・SDを標榜した学部独自の試みは皆無であった。とはいえこの一年間、学科や専攻からは各々の専門分野に従って計九回もの意欲的な講演会、ワークショップ等が企画、開催され、それらが教育のみならず、教職員への啓発に寄与しなかった筈はない。もっとも、六学科おのおの独自の教育プログラムを展開している文芸学部では、一過性のイベントもさることながら、むしろ各学科における日常の試行錯誤に求むべしというのが、私のいつわらざるFD観だ。よってここでは些か視点を変え、私の属する国文学科での、他大学にはない試みを紹介してみたい。それは卒業論文を手書させることである。

卒論をいかに手で書いて完成させ、提出させるか。これは国文学科教員の大きい課題であり、毎年学科会議での真剣な討論の議題ともなっている。いったいこのご時世、なぜ手書なのか。それを学生たちに(あるいは時折批難を浴びせてくる他学科の教員に)了解させるためには、まずは教員全員が以下のような教育目標を共有しておく必要がある。

1. 文字への理解。日本語の文字は漢字仮名を問わず動体である。静止した記号ではない。このことを追体験するには、書家の石川九楊さんが夙に述べられているごとく、みずから手を動かして書くにしくはないのであ



る。とくに平仮名でそれは顕著であり、たとえば現代のフォントがなぜあのような形をしているのか、それを理解することは国文学徒たるべき第一歩なのだ。「あ」が「安」の、「い」が「以」の、「う」が「宇」の草体であることを理解すれば、筆法や書き順にも必然性があることに思い到るであろうし、本来が流麗な草体であることと平仮名が丸みを帯び、かつ次の文字への縦方向の連綿に便利な形となっていることは、手を動かしてはじめて体感できることではないか(したがって書式も、原則として縦書き)。他の学問領域ならまだしも、こと日本語ないしそれを使った文芸作品を研究するからには、最低限そうした知識や感覚を備えるべきである。

2. 思考の根本的相違。ワープロになって文体が上滑りするようになった、漢字を忘れたなどといった声が、その転換期にはよく聴かれたものの、最近は余り耳にしなくなった。木の燃え杭で洞窟の壁面に絵や文字らしきものを書いた原始時代からずっと変わらなかった手書の歴史が、ワープロ出現によって一朝のもとに変化を余儀なくされたことは、文明史的転回であるとともに、実は人間の知能における一大転換でもあったといつてよい。出来上がった文字面が変わり映えしないから気付きにくいだけで、カナやローマ字でキーを叩いた瞬間、予想される文字や語彙や表現が選択肢として提示されること、なにも無い所から字書を引き引きそれらを捻り出して文章を書くことは、脳の働かせ方が根本的に相違すると思われるからである。恐らくこの相違は今後脳科学的に

立証されることであろう。選択の余地があるだけ頭をはたらかせているから同じではないか、などという批判は当たらない。それは既にそうした語彙が備わった人の選択なのであって、最初からインプットされていないものを、人間は次第に選択しなくなる。それはそのまま思考の貧困化を意味しよう。少し前まではワープロが勝手にはじき出す同音異義の語彙を翫び、わざと誤用を娯しむネット語が蔓延したが、今ではそれがどれほど誤用と認識されているか分からぬほど、奇妙に定着しつつある。それが言語の時代的变化というものだと割り切ることも一つの生き方かもしれないが、少なくとも国文学科生ならばその変遷を客観視し、たえず根源に立ち戻る姿勢を貫いてほしいのである。

3. 身体性の覚醒と愉楽。私のような昭和三十年代生れ以上の人ならば、中学に入って初めての英語の時間、あの四線譜のような罫紙で欧文の筆記体の練習をした体験を持つであろう。多くは自分の名前をローマ字で書く程度のたわいもないことで遊んだりしていたが、それとて生れて初めて英語を学ぶ、という実感と喜び、そして学習意欲への導入になっていた筈だ。それが今や英文を筆記体で書いて見せるだけで、若き欧米人たちからも驚かれる時代になった。事ここに及んで小学生にକୁずし字を書かせたら、どんなに日本語に魅了されるであろうか。漢字、仮名を取り混ぜ、時に頭注や割書きを施し、訓点を傍記したりしながら、用途や場面に応じて字面を变幻自在に変える日本語は、音声言語中心の言語理論が通用しない、極めてヴィジュアルで美的な言語である。国文学科の開設科目は教員免許も取得できるようになっているが、日本語の魅力を伝えるためには教員自身がまずその場で書いて見せ、そして書かせることに尽きる。昔の小学校の先生は、板書の文字が実に見事であった。

4. モノとしての論文。手書の論文提出にはもう一つの狙いがある。それは手書した原稿用紙を二つ折りにし、黒表紙を付けて題簽を貼らせ、紐で綴じ、書冊体として完成させることである。袋綴じの際、原稿用紙の中央にある空間(これを柱という)や黒い三角形(これを魚尾とい

う)で見当をつけながら二つに折る。このことで写本用の印刷罫紙に書いた江戸の文人たちと同じ体験をすることとなり、否応なしに書冊の構造も分かる。電子ファイルをウェブ入稿するだけでは決して味わえぬ達成感。私たちは中身だけでなく、この自作の書冊をもって卒論の最終形態、評価の対象とみなす。ただ目下の問題は、いかなる理由からか、事務の窓口がこの書冊体を受理してくれないことである。

これだけメディアが発達した今、巷間行われることと同じことを教えても、学校の存在意義はますます薄まるであろう。ましてやチャットGPTばやりの現在、卒論もそれに頼ることが普通になるに違いない。ワープロで下書きし、それを手で清書する学生たちの多いことも承知しているつもりだが、問題はそれをあらためて手で書く際に使われる知力や労力の効果を、我々は期待しているのである。もっとも書記障碍などの学生へは慎重に対応すべきだが、それを怖れる余り手書の効用を捨て去っては本末転倒ではないか――。

如上の目標がアナクロニズムと一笑に付されることはもとより織り込み済みである。ことわっておくが、国文もかつては卒論にワープロを認めていた。手書は旧習を墨守しているのではなく、むしろ先進性すら企図した、積極的変革なのであった。こうした試行と議論も、FD活動として挙げるのが可能なのではあるまいか。



キャリアセンター

キャリアセンターにおけるFD・SD活動について



キャリアセンター
植木 紀之 課長

本学キャリアセンターは、他大学の多くがそうであるように「就職課」を原点とし、大学におけるキャリア教育導入の流れに乗る形で2007年に「キャリア支援部」へ改称、その後、授業科目である「キャリアデザイン科目」を所管するにあたって、2015年に現在の「キャリアセンター」に改組されました。よって、当然のことながら、当センターは「キャリア支援・教育」と「就職活動(進路)支援」を「両輪」として、様々な施策を展開しています。特に近年、コロナ禍の影響を受け、この「両輪」に従来とは異なる新たな内容を取り入れることが必要となり、これに対応するためのFD・SD活動を展開してきました。

・「キャリア支援・教育」(キャリアデザイン科目)に係る活動

キャリアセンターが所管する授業科目「キャリアデザイン科目」は、2011年度から開講し、2017年度にカリキュラムの見直しを実施した後は、大きな変更は行われずに現在まで運用されてきました。

しかし、年々変化するキャリア教育を取り巻く環境に十分対応できていない面もあったことから、2025年度に新カリキュラムを導入することとし、キャリアセンター長である南山浩二社会イノベーション学部教授と当センター所属の勝又あずさ特別任用教授により、新カリキュラム案を策定することになりました。

新カリキュラム導入検討に際しては、まずキャリアセンター教職員全員が、近年のキャリア教育の状況、現行カリキュラムの問題点や新カリキュラムの構成について理解を深められるよう、勝又特別任用教授に新カリキュラム案のコンセプト等についてのレクチャーをお願いし、これを受けて教職員間でのディスカッションを

複数回行うことで、成城大学における今後のキャリア支援・教育の方向性を見出していきました。

さらには、勝又特別任用教授にご協力いただき、職員が実際の授業に出席し、フィールドワーク等に参加することで、授業の展開方法や授業内で取り上げられる諸問題への理解を深めつつ、今後のキャリア教育の在り方について考える機会を設けました。

・「就職活動支援」に係る活動

就職活動もご多分に漏れずコロナ禍により大きな影響を受け、オンラインツールの活用によるデジタル化が進むなど、これまでにはなかった新たな方式が導入されました。結果として、様々な情報やツールが出現したことによる就職活動の「複雑化」が起きました。加えて、近年の人材不足を反映し、企業側はいち早く優秀な人材を確保しようと「青田買い」まがいの早期選考を実施するなど、就職活動の「早期化」にも拍車がかかっている状況です。

このように、就職活動環境は目まぐるしく変化しており、学生支援者としての教職員には、これまで以上のスピードで新たな知識・スキルを獲得することが求められています。

そこで、コロナ禍が落ち着きを見せ始めた2022年度に、株式会社文化放送キャリアパートナーズ就職情報研究所所長の平野恵子氏をお迎えして、2日間に亘り「就職活動支援者向けセミナー」を実施し、コロナ禍前後における就職活動状況と今後の見通しについて学びました。このセミナーの動画と資料については大学全教職員にも公開・共有し、就職活動の現状について理解を深める機会といたしました(写真1、2)。



(写真1)



(写真2)

2023年度前期には、キャリアセンターの現状と課題及び今後の方向性について、教職員間で共通認識を持つべく3回の研修を実施し、南山センター長による総括をもとに今後の方針が確認されました。

この過程において、教職員は適切な学生対応ができてきているのか、特に様々な特性を持つ学生や、就職活動をきっかけにメンタル不調にある学生への適切な対応とはいかなるものか、といった重要な問題が改めて共通認識されるに至りました。

そこで、これまで以上に学生相談室との緊密な連携を図るべく、同室及び学生部の協力を得て、学生対応に関する研修を行うとともに、定期的に情報交換を行う機会を設けることとし、現在に至っています(スライド1)。

私たちの学生対応
キャリアセンターとして「なに」を目指す？
「どこ」に向かう？

成城大学キャリアセンターとして、学生たちにはどんな学生に成長してほしいと期待しているのでしょうか

その実現のために私たちが今行っていることは何でしょうか

やっ...
さらなる向上のために工夫が必要だと思...

(スライド1)

• 「キャリアセンターにおける今後のFD・SD活動について

「キャリア支援・教育」においては、各種プログラムがキャリアセンターの目指す形で展開されているか、時代の要請に応えたものになっているかなどをチェックし、将来のさらなる改革に備える必要があります。

また、「就職活動支援」においては、前述した就職活動の「早期化」が、新卒一括採用ではなく通年採用やジョブ型採用を本格導入したい大企業の思惑によるものといった指摘もあり、この流れが決定的となった場合は、大学等でこれまで行われてきた就職活動支援策は全く通用しなくなることから、あらゆる対応策を常に想定しておくことが重要となっています。

これらのことを認識したうえで、コロナ禍等によりややもすれば後手に回りがちであった当センターのFD・SD活動を、体系的に再構築する必要があると考えています。キャリアセンター教職員一同の「教職協働」により、次の時代を見据えたFD・SD活動を展開していきたいと思...

「授業カタログ 2023」を刊行しました!

授業カタログは、先生方の優れた取り組みや授業方法をご紹介し、大学全体の授業改善や効果的な履修指導に寄与することを目的に毎年度刊行しています。

2023年度版では、新たな試みとして、視覚的共有の観点をより強化し、ポスター形式の両面見開きで、2名の先生にご登場いただきました。

先生方の工夫と実際に受講した学生の声とを誌面上で共有することで、今後の授業改善のヒントとしていただけましたら幸いです。

2024年度版の作成の際も、先生方におかれましては、授業の取材・撮影のご協力をお願いいたします。



掲載内容を大学HPで公開しております。ぜひご覧ください。

2024年度活動計画

- | | |
|----------|--|
| 2024年 4月 | 新任教員研修会 |
| 5月 | 2023年度授業改善アンケート集計結果報告公開 |
| 6月 | FD・SDセミナー「学部等関係課程制度を活用した新たな学位プログラムの設置について」 |
| 7月 | 前期授業改善アンケートの実施
ベストティーチャー賞表彰式
FD・SDセミナー「設置基準改正と高等教育政策動向を踏まえて求められる大学の対応」 |
| 9月 | 前期授業改善アンケート集計結果報告公開
後期授業改善アンケートの実施 |
| 10月 | 成城大学FD・SD Activity Report 2023年度版発行 |
| 12月 | 2025年度事業計画、予算概算要求書確定 |
| 2025年 3月 | 授業カタログ発行 |
- ※1 時期が未定の事業
- ・FD・SDにかかる研修会参加、他大視察
 - ・FD・SD講演会・ワークショップ
- ※2 事情により、上記の予定が変更になる場合があります。

成城大学教育イノベーション委員会FD・SD小委員会委員 (2024.5.1現在)

- | | | |
|-----|------------------------|----------------------|
| 委員長 | 都築幸恵 (教育イノベーション委員会委員長) | |
| 委員 | 都築幸恵 (教育イノベーションセンター長) | 鋤本豊博 (法学研究科) |
| | 山重芳子 (教務部長) | 加藤敦宣 (社会イノベーション研究科) |
| | 境新一 (経済学部・経済学部研究科) | 上野英二 (全学共通教育運営協議会議長) |
| | 宮崎修多 (文芸学部・文学研究科) | 新井和之 (事務局長) |
| | 池田雅則 (法学部) | |
| | 青山征彦 (社会イノベーション学部) | |

発行日 2024年10月

成城大学教育イノベーション委員会 FD・SD 小委員会委員 (2023.7.5 現在)

委員長 都築幸恵 (教育イノベーション委員会委員長)

委員 都築幸恵 (教育イノベーションセンター長) 木下誠 (教務部長) 金春姫 (経済学部) 宮崎修多 (文芸学部・文学研究科) 池田雅則 (法学部) 青山征彦 (社会イノベーション学部)
上田晋一 (経済学研究科) 鋤本豊博 (法学研究科) 加藤敦宣 (社会イノベーション研究科) 上野英二 (全学共通教育運営協議会議長) 新井和之 (事務局長)